
教育総合センター だより

NO. 171

令和 6. 3. 1



生徒に将来「先生になりたい」と言われたとき
心の底から応援できるだろうか・・・

高校教育課
課長 石川 一

今までは出来る限りの応援をしてきたが数年前から抱き始めた疑問である。とは言え、まずは生徒の考えをしっかりと聴くことが大切なのだとは思っている。おそらく生徒は、教育に対して情熱や使命感を持ち、常に学び続ける姿勢の魅力的な先生に出会ったのだろう。でもそれだけで先生を目指していいのかという疑念がいつしか頭をもたげてくるようになってしまった。

私は小学生の頃から授業中の先生の発言などが気になって仕方がない質で、よく誰から頼まれた訳でもないのにクラスを代表して担当の先生に物申す生徒であった。中高時代、「授業が分からないのはお前たちが悪い、嫌なら出ていけ」と怒鳴られたことに対して、先生を真っ向批判したりもした。すると、「あなたがクレームをつけた先生は校長と深い繋がりがあるのでまずは謝った方が賢明だ」と担任から言われたことを鮮明に覚えている。と同時に大切な記憶となっているのはその時に私たちの気持ちを理解しようとしてくれた先生方の言葉である。「お前はみんなが言いにくいことを言っているだけ。俺はお前たちの代わりに担当の先生と話をつけてくる」という言葉だった。私はその時、思春期のモヤモヤをも含めて捌き取り支えてくれる大人に出会ったと感じ、将来自分もこのような先生になりたいと思った。

当時の先生は学校の荒れを恐れる管理教育派とそこから脱却する考えの挟間にあり、方向性を持ってないまま授業を行っていたのではと今は思う。大学受験を目指す生徒は学校ではなく塾や予備校で勉強するという構

図であった中、学校で分かりやすく質の高い授業をするために創意工夫することは難しかったのかも知れない。

しかしその時代にも生徒に主体的に学ばせようとグループワークを取り入れて深い学びをさせようとする先生が稀にいて、生徒たちからの評判はすこぶる良かった。私はその教科だけでなく先生の人間性にも興味を持ち成績向上につながったという経験がある。

授業力だけではなく、生徒に対して真摯に向き合い生徒の悩みは時間をかけて聴ける先生、自分の時間を削って勉強を教える先生など、多くの時間を生徒に費やす人がいい先生であると学生時代の私はそう感じていた。

先生になり 30 歳代まではその理想の先生スタイルで突き進んだ。しかし 40 歳直前に行き詰りを感じ、苦しんだ末に生徒指導を学び直すことに行きついた。自分の弱さをさらけ出すと、心から尊敬できる研究者や同じように悩む全国の先生と出会える幸運に恵まれた。この出会いがなければ自分は先生を続けていられたか分からないとさえ思う。今もこの仲間たちと会うと教育の未来への活力を枯らすまいと思える。

そんな私がこれから先生になりたいという情熱がある若者だけではなく、先生にでもなってみようかなと考える若者に伝えられることがあるとすればスローガンっぽく笑われるかもしれないが「悩みや葛藤を誰かと共有しよう」と掲げ、「ミスや失敗などで心が折れないような学校を一緒に作ろう」ということになるだろうか。

☆☆「エビデンス」と向き合って☆☆

これまで、本市の研究部会では、今日的な教育課題に応じたテーマを設定し、研究を進めてきました。

その研究部会の1つである「エビデンスに基づく教育実践研究部会」は、市内の小中学校から推薦された学力向上等を担当する研究部員が、平成30年度より本市で実施している「あまっ子ステップ・アップ調査」の結果を分析し、自校の学力向上に向けた取組を検証、改善すること目標に取り組んでいます。

本研究部会を進めていくなかで、明らかに成果としてあがっていることがあります。それは、学力調査(いわゆる点数学力)の分析だけでなく、意識調査の分析も行うことで、児童生徒の内面を丁寧に見取り、学力向上につなげようと考えている学校がこの3年間で急増していることです。豊かな土壌がない所に花が咲かないように、目に見える学力だけを見据えるのではなく、児童生徒の内面の「エビデンス」にも目を向け、実態に即したさまざまなアプローチが日々、学校で行われています。

今年度の研究部会では、「小中連携」を意識し、「義務教育9年間でどのような児童生徒を育てたいか。」というテーマで交流を進めました。

「小学校で〇〇の意識がすごく上がっている。ぜひ中学校でもつなげてほしい。」

「小学校と中学校が協力してこういう取組ができれば、〇〇についてもいい傾向が見られるかな。」

「小学校のこの取組は中学校で活かされていないな…」

研究部会の活動では、このような言葉が飛び交い、中学校区ごとに共通した目標を見つけようと交流をされていました。

一方、学力向上の取組を進めるにあたっては、日々の業務や指導に追われ、取組がなかなか継続されないなど、課題も見えています。

そこで、1月には、大阪教育大学大学院教授 木原 俊行 氏を招聘し、「学力向上の取組を校内で活性化させるためには」というテーマで講話をいただきました。

講話の中では、令和6年度の学力向上計画を立案する際に、担当者としてどのように計画をしていくのか。そもそも、「学力」とは何を指しているのか。「よりよい授業をめざして」の視点から授業改善を進めていくこと、あまっ子ステップ・アップ調査や全国学力・学習状況調査から見える「エビデンス」に向き合うことの大切さ、管理職の先生との連携など、学力向上計画を考える視点について実際にワークを交えながら講話をいただきました。校区ごとに作成された学力向上計画が各校で共有され、取組がさらに充実していくことを願っています。

最後に…学級票という帳票はご存じでしょうか。この帳票は、それぞれの先生方の温かい思いのもと、育まれてきた学級のようすを学力や生活面から見ることができます。「学級経営」とよく言われますが、「経営者」は、先見の明を持つことが大切です。1年間、何を目指し、どのように学級を経営していくのか。その目標に向かい、授業で、行事で、日々の関わりで…あらゆる場面でご尽力いただいたことと思います。今年度の「経営」を振り返り、また次年度に大きなPDCAサイクルを回していけるよう「エビデンス」を大切に、目の前の児童生徒を大切に、ともに学び続けていきましょう。

(学び支援課 指導主事 西田 篤司)

☆☆「学校運営アドバイザー」からのひとこと☆☆

この仕事を通じて、各中学校の管理職の先生方から、教員の未配置対応、教職員の組織編制、保護者対応、生徒指導、関係機関対応等多くの相談を受けます。そして、そんな多忙な中でも生徒の更なる成長を願い各校が学校改革に取り組まれていることに感銘を覚えます。そこで、今回はその中の2校の取組を紹介させていただきます。

【 日新中学校 】

学校運営上の基本理念の最上位の目的を「誰も置き去りにしない学校」と定め、次の学校改革に取り組まれています。

〈校則変更について〉

- ・校則検討委員会（生徒会と教員）を設置、子どもの主体的な意見表明の機会として「専門委員会」を位置づけ。校則を廃止し「身だしなみ」とする。

〈行事運営について〉

- ・体育祭の運営。文化祭においては生徒が企画書を作成し、企画・運営を行う。

〈確かな学力について〉

- ・中間テストを廃止し、単元テストを実施。
- ・個別最適な学びを自由進度学習で実施。（個別指導計画を作成し、生徒自身が授業の中で3つの中から自由選択する。）
 - ① 教科担当者による個別最適な支援を受ける。
 - ② 集団討議&グループ学習、ICT活用、講義形式。
 - ③ 進度を考慮し学習形式を自己選択。

〈不登校対応について〉

- ・教科の学習に取り組むことを完全に無くしたプレイパーク的な試みを開始。生徒は1日のスケジュールを自己管理、自己選択して実行。プレイスクール(図書室)・教室外の学び舎(職員室前、廊下、ホール)

【 大庄北中学校 】

学校運営の基盤を「人間力に支えられた学力向上」として基礎学力の定着、意欲的に学ぶ生徒の育成を目指し、組織的に教員の授業力向上に取り組まれています。

〈授業力向上について〉

- ・協同的探究学習の校内研究授業を年間2回実施。(講師 東京大学大学院 藤村教授)
- ・コラボるタイム。授業で協同的学習の時間を取り入れる。(生徒の座席を市松模様で、ペア、4人組、6人組の班編成ができるように学校全体で取り組む)
- ・「できる学力」・「わかる学力」の両輪の育成。導入問題で①個別探求②協同探求(コラボるタイムなど) ③集団で意見を共有し関連づけ。その後、展開問題による④個別探求で考えを深める。
- ・授業改善アンケート
全教員の授業に対する生徒アンケートを実施し、授業改善に活かす。

〈基礎学力の定着について〉

- ・朝学習(同じ教科で4回実施し、5回目に小テストを行う。)
- ・終学習(6時間目終了後15分間でコグトレを行い、残り時間自学を行う。)
- ・課題(宿題)の形式 プリント半分を一問一答の「できる学力」の育成、残り半分を記述式の「わかる学力」で作成。
- ・宿題の見える化
ホワイトボードに宿題や学習内容の記入。

※紙面の都合上、小田北中学校の不登校の取組等を紹介できないことが残念です。

(学校運営アドバイザー 中 俊弘)

教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ね下さい。

(3F 教育情報コーナー)

【新着図書】

- ・『戦後教育史 一貧困・校内暴力・いじめから、不登校・発達障害問題まで』
小国喜弘 著／中央公論新社
- ・『教員不足クライシス 一非正規教員のリアルからせまる教育の危機』
山崎洋介・杉浦孝雄 他編／旬報社
- ・『幸福感に満ちた学校をつくる』
塚田昭一 著／東洋館出版社
- ・『最新教育動向2024 一必ず押さえておきたい時事ワード60&視点120』
教育の未来を研究する会 編／明治図書
- ・『Q&A 多様な性・トランスジェンダー・包括的性教育 バッシングに立ちむかう74問』
浅井春夫・遠藤まめた 他編著／大月書店
- ・『逆境に克つ力 親ガチャを乗り越える哲学』
宮口幸治・神島裕子 共著／小学館
- ・『なぜかいじめに巻き込まれる子どもたち』
川上敬二郎 著／ポプラ社
- ・『スクール・シフト 一あなたが未来の「教育」を体現する』
宮田純也・赤堀侃司 他編著／明治図書
(担当 松浦)

☆「ひと咲きタワー」は、学びのタワー！

【本の紹介】

■『やさしくわかる生徒指導提要ガイドブック』2023年10月初版発行 明治図書出版
著者 八並 光俊他：東京理科大学教授 専門は生徒指導。日本生徒指導学会会長、中央教育審議会委員
インディアナ大学客員研究員、2009年度アメリカ国務省より次世代の日本のリーダーに選出。
他、石隈利紀東京成徳大学教授、田村節子東京成徳大学教授、家近早苗東京福祉大学教授が編著者
2022年12月に文部科学省より刊行された『生徒指導提要』（改訂版）の解説書である。八並光俊教授は同書の作成を検討する「生徒指導提要の改訂に関する協力者会議」の座長であり、その視点で、同書の意図や内容を分かりやすく解説している。Q&A方式で書かれており、読みやすい本である。

■『夜間中学はいま』 「こんばんは」からはじまる中学校があります
産経新聞大阪本社 2023年9月初版発行 著者 夜間中学取材班

平成31年より同新聞で連載された「夜間中学はいま」を再編集した冊子である。本市の成良中学校琴城分校をはじめ、関西を中心に夜間中学と、そこで学ぶ人々が紹介されており、まさに「夜間中学のいま」が理解できる。平成28年12月の教育機会確保法の成立もあり、夜間中学には様々な背景の生徒が在籍しているが、本来の学びの意味や、学習ニーズの多様化に対応するという課題等、考えさせられることの多い本である。

※教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。

(担当 西川)